

《論 文》

過去6年間の資格英語（TOEIC）への 取り組み成果，課題と展望

海老澤 邦 江*

1. グローバル化社会と英語

2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催される。その開催と時を同じくして、日本の英語教育が大きく変わろうとしているが、もうすでにその伏線として対策が、小学校からの英語教育必修化という形で表れている。以前、拙論においても、英語話者人口が、中国語を母語とする人口とほぼ匹敵するだけでなく、英語を母国語としない国への渡航者の割合が海外渡航者全体の75%に上る現在、英語が非英語母語者同志のコミュニケーションツールとしての役割を益々高めているというブリティッシュ・カウンシルの調査研究を紹介した^①。

「英語教育の在り方に関する有識者会議」は、2014年9月に英語教育改革に関する議論を終え、そこでの提言を基に具体化を図るために中教審へと舞台を移すことになった。会議を傍聴していた私は、あらためて英語教育が日本社会へ及ぼす影響が想像以上に大きいものであることを実感した。というのも、会議終了間際にひとりの委員が、将来の大学入試に関して、単に入試形態が変わるといだけでなく、その影響の大きさ故に、英語教育産業の隆盛がある一方で、メディアに中途半端な情報が流れることで地域格差や保護者の経済格差に影響が及ぶ可能性をすでに指摘していたからである。大学入試英語に関する今後の動向が、日

本の児童、生徒、学生の今後の将来を左右すると考えられる発言内容である。また、英語教育の改革に対する文科省側の発言からは、グローバル化社会に対応するために改革が急務となっている英語教育の状況が窺える^②。

グローバル化への対応が今迫られているわけでございます。その基本にあるのはやはり、生徒にいかにして発信していく内容をまず持つかということ。発信するものがなければ、発信する能力だけあってもしょうがありません。その基本になるのは国語の力であったり、あるいはいろんな教科の力であったり、こういう力というものをしっかりとつけていく。その上で、国際化する社会の中で實際上英語が使われておりますので、発信する力を含めた四つの能力というものをしっかりと身に付けていくということが、これからの日本の社会にとって、あるいは日本で教育を受けた人たちが世界で、国際的に貢献し、活躍する上で必須の能力であると思っております。

この発言の裏には、アジア諸国31か国中、モンゴルと並んで日本は26位という2013年のTOEFLの結果がある。また、これまで4技能を重視と言いながらも、教科内容や入試、また指導する教員の側に2技能（「聞く」「話す」）に重きが実際には置かれていなかった（「また指導体制の充実という面で、日本の指導体制のところでは、聞くとか話す能力のところが欠けております…」）

* 江戸川大学 情報文化学科教授、語学教育研究所長

という反省とも受け取れる発言が続いている。入試を初めとし、教育内容、授業形態および運営方法、学士力、教師の教授能力と質など、従来の英語教育を見直し抜本的な改革を行ってゆくという。4技能をバランスよく学習し十分な発信力を身に付けるという学習目標があるものの、これまでの英語教育では達成できていないという反省、それはまた、グローバル化社会の要請にきちんと対応できていない、学校教育における英語学習が実社会で通用する英語コミュニケーションからかけ離れているといった、実業界からの教育行政への強い批判に対して反論できる余地がなくなるほど、差し迫った事態であることを感じさせる。

有識者会議の終了と同時に、スーパーグローバル大学37校が発表されるに至るのだが、それ以外の大学がグローバル社会の対応にそれほど力を注がなくてもよいというわけではない。むしろ、各大学の教育環境や教育内容に沿って、独自の特色を出すような取り組みや英語教育の新機軸がさらに求められている。しかしながら、これまで何もして来なかったわけではなく、長年、英語教育界では様々な取り組みが試されてきたのも事実である。秋田県立国際教養大学の場合のように、教育環境そのものから根本的に変え成功しているのだが、これはごく限られたケースであり、そのまま形態のみを模倣して大学に移植してもうまくゆくとは限らないであろう。

今回、文科省は小学校の英語も英語で授業を行うことに言及している。初等教育において、音声重視の英語教育が成果を上げるかどうかは今後の展開を見なければわからないが、語学学習は、その言語環境に大きく左右されるのは確かであろう。日本語で英語を教えるというのは、訳読中心の英語教育の伝統から由来するもので、内容的には英語学習というより日本語学習の比重が大きいため、本来的には矛盾することなのだ。幼い子供の言語習得は、親の呼びかけとその模倣の発声から始まる。この基本が徹底しない内に高次の内容に移って行ってしまうのが、中等教育における英語学習の実情なのではないであろうか。4技能をバランスよく身に付けることは語学学習の理想ではある

が、先述したように、その中でも「聞く力」「話す力」を重視する方針を打ち出したことは、一見当たり前のように思えても、注目すべきことであろう。

私見であるが、特に「聞く力」は語学学習の基本である。話者が伝達することをまず理解することから、コミュニケーションは始まると言ってもよい。基本でありながらも、「聞く」という行為は、基本的な英文構造理解、音声認識できる語彙力、推察力や状況判断力などを含んでいる。巷の「聞き流すだけで英語がわかるようになる」という文句のように苦も無く身につくというものではなく、音声認識が可能となる、さらに基本的な知識や知力を必要とする。例えば、比較的長い英語ナレーションを学生に聞いてもらう際、その中で、わずかでも英語を認識できると、さらに聞き取ろうと努める。認識できた英単語もしくはフレーズを「点」とすると、それら点と点をつなぎ合わせて大まかな内容を推測することも可能な程度まで理解が進むと、学生はある種の達成感や満足感を得られる。また、別な例では、海外研修を終えた学生の感想は、「まず聞き取れないとコミュニケーションができない」というものである。この率直な感想は当たり前なのであるが、こうした事態を英語教育の根幹に関わるものとして真剣に取り組んでこなかったのも事実であろう。

2. キャリア教育としての TOEIC

本学で現在学内試験を実施しているのは、TOEIC（リスニング&リーディング）と実用英語技能検定（英検）の2種類である。英検は、中学校時代から馴染のある試験なので学生の中での認知度は高いが、TOEICについては、学内受験を再開した6年前には、多くの学生には未知のものであった。本学の開学時に入学生が全員TOEICの受験を義務付けられたこともあったのだが、その後諸般の事情で取りやめになったと聞いている。英語資格取得に当初力が注がれていたものの、徐々に英語学習の中心からはずれていったようだ。しばらく学内受験の実施が途絶えてい

たわけだが、カリキュラムの変更や新学科新設など、学内の変化に従って再び英語資格に注意が向けられた。

この動向の端緒は、開学当初から全学生対象であった海外研修が必修から一部必修へと変わったカリキュラムの変更である。それまで、英語コミュニケーションや異文化体験を海外研修で学習し必ずしも英語資格取得に大きな比重をかけなくとも、大学全体の英語教育の充足度を認められていたと考えられる。しかし、一部必修としたことで、本学の学生の大半が海外体験をすることなく学業を終えるという状況が日常化してきた。それと比例するように、学生にとっての英語は、教室内の座業という位置づけになってしまったようだ。それに加えて、当時の「ゆとり教育」の影響もあって、大学入学時の英語の基礎力は低下していった。社会的には、英語ができなくても就職はできるといった経済状況があった。つまり、学生にとって英語は、卒業単位をかせぐためであり、自分の将来に直結する学習ではなかったと言っても過言ではないであろう。

しかし、そうした牧歌的状況に大きな衝撃を与えたのは、2008年のリーマンショックであろう。経済界・実業界に大きな衝撃を与えた事件は、即、大学の就職活動にも大きな影響を及ぼした。より質の高い人財を求める企業は、コミュニケーション能力の高さや「学士力」を問題にした。企業面接でよく質問される内容として、「大学で何を学んできたのか」が現在でも重視されているようだ。さらに、「グローバル化」をキーワードとして、英語運用能力が特に注目を集め始めた時期とも重なる。そうした流れの中に、「資格取得」が学生の能力を示す客観的証明として以前にも増して求められ、大学における教育成果の指標にもなりつつある。

このような動向から、本学の国際化にも通じる英語教育の一環として、英語資格取得への対応が求められたと言えよう。その際、「なぜ TOEIC なのか、以前にやって成果が上らなかったことを手間暇かけて復活しようとするのか」あるいは、「TOEIC は難しすぎるから、学生には無理」など、

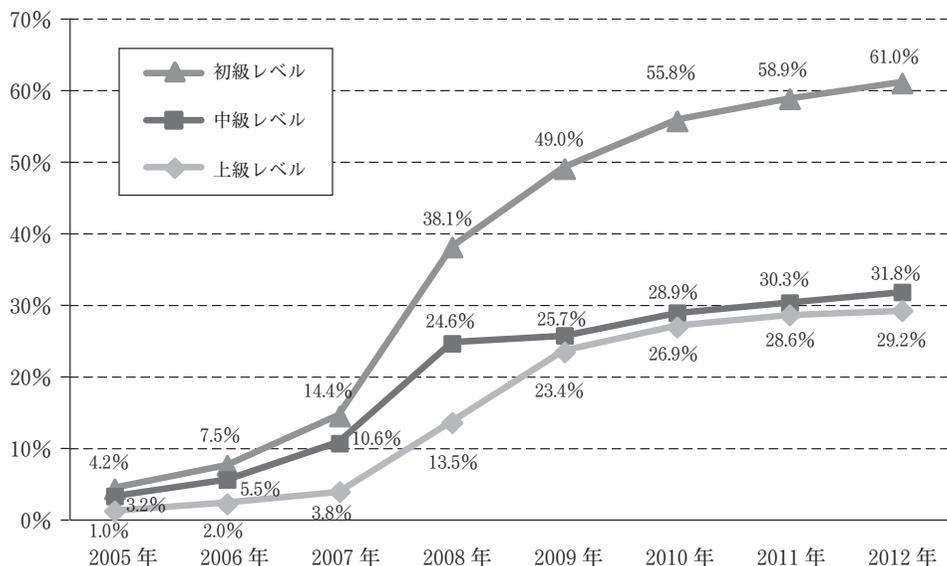
学内試験実施に関しては、様々な方面から疑問が投げかけられた。確かに、学生に向かって「TOEIC というテストを知っていますか」と問いかけても、40人ほどのクラスで手が上がるのは数名、それもどのような試験が全く知らないという白紙状態であった。実際、当時のカリキュラムでは、英語資格取得科目は、現在の1群に置かれ、それも卒業単位として認められない自由科目という位置づけであった。後に当時から現在までの科目履修者数の推移を示すつもりだが、私が最初に担当した TOEIC 対策の受講者数は、5~6名で実際に受験できる程度の学生は、その内数名に過ぎなかった。

現在、日本のほとんどの大学で TOEIC 受験を推奨している。こうした試験を大学の英語教育でまともに取り組むべきなのかという疑問もあるが、以下のデータ（図1、図2）を参照することでキャリア教育の中では等閑にできないということがわかるであろう。2005年~2012年までの約20万円の求人の内、英語力を求める求人割合の推移をまとめたものである。それぞれのレベルは、TOEIC のスコアを基準にしている^③。

特徴的な点を簡単にまとめてみる。初級レベルを求める求人は、2005年では全体のわずか4.2%であったが、2012年には61%と大幅に増加している。特に、2008年を境に急上昇している点に留意したい。これは、リーマンショックの影響であり、国内市場の限界を感じた企業が海外展開に目を向け始めたことによる。中級レベルについても、現在では、30%以上の企業が要求している。

その一方で、企業の求める内容と矛盾するデータがある。それは、大卒（22歳~29歳）の若手従業員の TOEIC 受験実態調査に示されている（図3）。

まず、受験経験者が全体の20%に過ぎず、残りの80%は受験したことがないという結果である。また、受験者の結果を見ても、現在の企業が求める英語能力を備えている者が少ないという結果は注目すべき点であろう。アンケート対象者は、TOEIC 受験がそれほど大学教育の中で重視されていない、あるいは就職活動の際に英語能力に関



初級レベル：簡単な読み書きや会話ができる。(～500点)
 中級レベル：相手の意見を理解し、自分の意志を伝えられる。(500～800点)
 上級レベル：ビジネスにおける商談・交渉ができる。(800点～)

図1 英語力を求める求人割合の推移 (2005年～2012年)

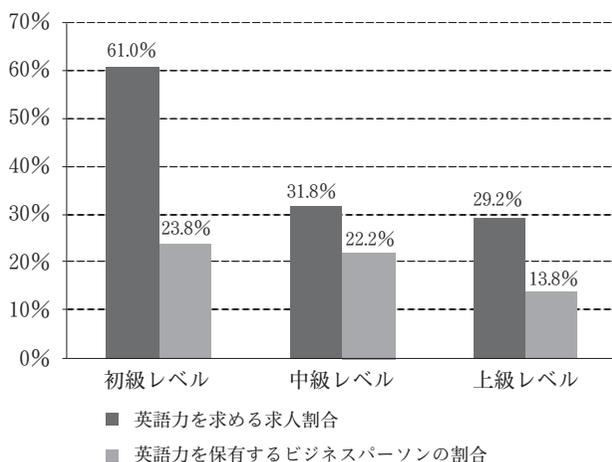


図2 企業が求める英語力とビジネスパーソンの英語力 (比較)

してはほとんど問われなかった世代と考えるのもよいであろう。しかし、現在の学生は、すでにTOEICを積極的に受験する世代となっている。学生時代に受験経験をした場合とそうでない場合には、スタート時点から差が出てくるとも考えられる。就職してから受験勉強を開始する者と、学生時代からある程度知識と体験を蓄積した者とを

比較しても、後者の方が心理的な側面から言っても余裕を持って準備ができる体勢が備わっていると言えるのではないだろうか。

3. TOEIC と英語教育

外部試験として、本学では英検とTOEIC (リ

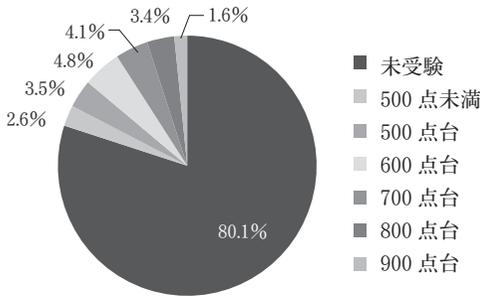


図3 ビジネスパーソンへのTOEIC®テストスコア

スニング&リーディング)が主に採用されてきた。一般的に馴染のある英検は、中学校から高校まで学校教育の中で学習してきた内容を踏まえているので、学習者にとっては受験し易いし、教育する側にとっては指導し易いという利点がある。文法問題、長文読解、リスニングは、基本的には高校までの教科書の学習内容を踏まえ、リスニングの想定場面は、家庭や学校が主である。それに対して、TOEICは、ビジネス場面を想定しているので学習者の経験値を考えると、学習しにくい、あるいは難しいと言った声をしばしば耳にする。

それでは、具体的には日本人学生が難しいと考える点は何かを考えてみたい。まず、リスニングについては、スピードであろう。1分間に話される語数をメディア別に比較してみる。テレビやラジオのドラマ=140-240語、CNN=185語、BBC=180語、大学入試センターのリスニング=145語、英検2級リスニング=145語、TOEICのPart3(会話問題)&4(英語ナレーション問題)=175-180語という結果がある⁽⁴⁾。高校までの英語学習者にとって、リスニングスピードは1分間に145語を基準としている一方、TOEICの場合は、それよりも早いということがわかる。ここで留意したいのは、実際に使用されている英語のナチュラルスピードと学校教育が求めるリスニングスピードの差である。つまり、大学受験を意識した英語のスピードを理解できても、実際に使用される英語のスピードでは理解が追い付かないということであろう。

学習場面においては、初級学習者の理解を促すためにスロースピードで英語を話す聞き取る練習

は必要であるが、実際に運用する際には、ナチュラルスピードに慣れることが必要である。また、内容についても、TOEICのリスニングに関しては必ずしもビジネス知識を必要としない。Part1は、写真を見て適切な説明文を選択するものだが、基本的には風景、人物描写を中心とした内容、Part2は、相手方の質問や感想に対して適切な応答の仕方を選択する内容で、日常場面における自然な応答を選ぶものである。学校教育の応答問題にしばしば見られる‘How are you?’に対して‘I’m fine, thank you.’といった常套語句の解答を求めるのではなく、‘OK. I can’t complain.’など自然な応答を期待している点だが、これまでの学習経験外の応答が学習者にとって難しく思えるのだろう。しかし、常套的な答えだけではなく、場面や状況に応じたヴァリエーションな応答ができることは自然なコミュニケーションにつながることを考慮に入れなくてはならない。

リーディングに関して言えば、英検の場合は、基本的な文法事項や動詞句、また会話の応答問題、長文問題には異文化理解を促す教養的な興味深い内容が多く、TOEICの場合は、新聞記事の出題は減りレターやEメールをベースにした出題が増加している。内容としては、問い合わせやクレーム、旅程の確認などが多く、現在のネット社会で、例えばネットショッピングなどで頻繁に使用される場面を設定している。ビジネス場面だけでなく、現在の日常生活でも十分体験しうる場面を含んでいる。英語学習の観点から見ると、基本的なビジネスレターの体裁や書き方、頻出するビジネス用語の基本が必要なので、ビジネス英語としての学習内容を備えていると言えよう。また、単文による出題がリーディングの40%を占めている。これらの問題は、基本的な文法問題を問うもので、たとえば、単文の中の主語に対応する動詞の形(いわゆる3単現のs)を選択する、単文にある時制を示す副詞などをヒントにその時制に適した動詞を選択するなど、英検3級程度の問題が少なからず含まれている。もうひとつの特徴としては、語彙問題で、派生語から文意に合う適切な品詞を選択するといったものである。英検とTOEICの

リーディングを比較すると、英検は、英文構造の基本と文法を重視し、長文の内容については興味深い内容への配慮が窺える。一方、TOEICの場合は、初歩的な基本文法と定型的なビジネス文書が中心となっており、リーディング内容は英検に比べると基本的実務である。この点からも、文量から見ても、英検の英文は精読傾向、TOEICの英文は速読傾向にあると言えるだろう。

本論において、英語コミュニケーションの基本として「聞く力」をどのように伸長していけばよいのかを検討するためにも、過去6年間に渡って行ったTOEICの学内試験の結果を精査し、受験者の動向と成績推移などをまとめてみた。学内で行うTOEICは「リスニング」「リーディング」の力を測るものであるが、今回は特に「リスニング」に焦点を当てる。出題量が豊富なこと、英語音声がアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアなどのアクセントが使用されていること、特に、ナチュラルスピードであることからリスニング力を包括的に判断するには、現状最も適切であると考えている。その結果から、今後の展望と課題を提示してみたい。

4. 調査結果

語学教育研究所に保管しているTOEIC受験に関する資料は、2009年2月を第1回として現在にいたる。因みに「キャリア英語」受講者（2009年度から2014年度）までの受講人数（のべ人数）と年度内のTOEIC受験者数（2009年2月受験者を除く）を示す。

表1

年度	開講コマ数	受講者数	TOEIC受験者数
2009年	6	36	39
2010年	3	15	30
2011年	6	37	32
2012年	4	44	51
2013年	3	36	39
2014年	4	110	51

ただし、これらの授業内容は、必ずしもTOEICに限らず、英検等対策の授業を含み、受講者数は学務に登録した人数で途中放棄の学生数も含まれていることを付記する。

以上のように、受講者数と受験者数が徐々にではあるが、比例して伸びているのがわかる。ただ、「キャリア英語」には、英検受験対策の科目が含まれているため、受講者全員がTOEIC受験をしたわけではない。特に2012年度以降増加した理由のひとつとして、ニュージーランドへの短期留学希望者には、その選考および留学前後の学習効果を調査するために、TOEIC受験を必須としたことにある。また、2013年度から、資格支援制度が発足したことも、大きな要因となっていると考える。

2009年2月から2015年1月の学内TOEIC受験者数は247名である。1年間に40数名の受験があったことがわかるが、先に示した表1からわかるように年度を追うごとに増加傾向にある。

次にこれまでの得点別人数の合計をまとめると次頁表2のようになる。

また、その割合を次の表3とグラフ（図4）で示す。

資格支援制度の褒賞対象および一般的に評価の対象となる400点以上を獲得しているのは、全体の31%を占めていることがわかる。300点台を獲得しているのは25%にも上り、その中には潜在的に英語力を秘めている学生が多く含まれていると思われる（表3、図4）。

次に、400点以上を獲得した学生のスコアから、リスニングとリーディングの平均値を算出してみた（表4）。

リスニングのスコアの方がリーディングのものより、はるかに得点が高いことがわかる。

両者の差を100点毎に比較してみる。まず、400点台では、リスニングとリーディングの得点差は、110点近くもあるが、500点台ではおよそ90点、600点台ではおよそ80点、700点台ではおよそ60点と徐々にその差が減少している。この理由としては、TOEICを初めて受験する学生の場合、テストの形態、長時間に及ぶテスト時間

表2 2009-2014 TOEIC 受験結果

回	年	月日	人	平均 (L&R)	最高	最低	800点	700点	600点	500点	400点	300点	200点	100点
				(L平均+R平均)										
1	2009	2月6日	14	390 (227.1+162.9)	595	245				3	3	4	4	
2	2009	5月30日	12	406.3 (242.5+163.8)	795	200		1	1	1	2	2	5	
3	2009	9月19日	15	452.3 (260.3+192.0)	810	225	1		2	4	1	4	3	
4	2010	2月5日	12	366.3 (219.2+147.1)	710	205		1	1	1		3	6	
5	2010	5月29日	17	293.9 (180.8+113.1)	405	175					2	5	8	2
6	2010	9月18日	13	431.2 (250.8+180.4)	735	205		2	1		5	1	4	
7	2011	5月28日	11	353.2 (230.0+123.2)	580	245				1	3	2	5	
8	2011	11月19日	12	432.9 (255.4+177.5)	590	220				4	3	2	3	
9	2012	6月9日	27	335 (209.6+125.4)	590	180				2	5	8	8	4
10	2012	10月27日	5	399.2 (259.2+140.0)	655	280			1			2	2	
11	2013	1月31日	19	270 (165.5+104.5)	460	145					1	5	9	4
12	2013	5月25日	7	435 (268.9+166.1)	465	280					1	5	1	
13	2013	10月26日	17	360.9 (210.0+150.9)	745	185		2			3	5	4	3
14	2014	1月30日	15	276 (167.3+108.7)	590	170				1	1	1	10	2
15	2014	5月17日	14	412 (242.3+169.7)	800	170	1		1	1	2	3	5	1
16	2014	10月25日	22	361.7 (225.4+136.3)	625	190			1	3	2	7	7	2
17	2015	1月31日	15	365.3 (225.0+140.3)	660	180			1	2	2	4	4	2

等などから英語学力以外の要素に不慣れなため、300点前後を獲得するのが一般的である。リスニングは、ナレーションに従って解答が進むので、時間中にリスニング100問を解答し易いが、リーディングの場合は、100問を自らの時間配分で解答しなければならない。速読に不慣れで初級の学

生たちにとっては、解答時間が十分でないため、50問ほど解答するのに精いっぱいである。

400点台のスコアを獲得する学生の多くの場合は、概してリスニングのスコアが高い。このあたりの学生は、リスニングのPart 1ならびにPart 2の分野で高得点を得ている。というのも、先述

表 3

スコア	800～	700～	600～	500～	400～	300～	200～	100～
人数	2	6	9	23	36	63	88	20

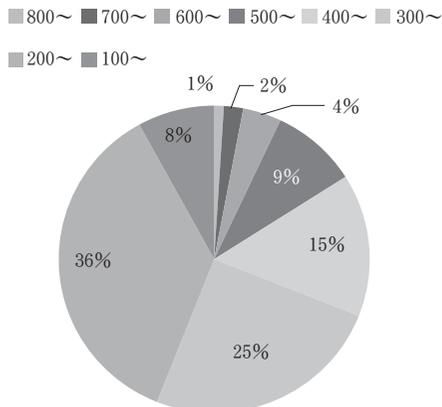


図 4 スコア別割合

表 4

	リスニング平均	リーディング平均
800 点台	430	392.5
700 点台	405.7142857	342.8571
600 点台	363.333	276.111
500 点台	328.4615	235.9615385
400 点台	274.4285714	167.4285714

したようにこの分野の設問は、日常的な場面を設定していること、またナレーションのスピードが、ナチュラルスピードより若干遅いため、解答し易いという利点がある。またこの分野のリスニングは、実際のコミュニケーションスピードに近いので、英語を理解するという面においても基本的な段階と言える。学生たちがこのレベルを理解できると、さらに聴解力を伸ばそうとする。

500 点台と 600 点台のスコアを獲得する学生は、Part 3 ならびに Part 4 の分野で得点を伸ばしている。600 点台以上を獲得する学生は、Part 3 と Part 4 の分野の問題をほぼ理解しうる聴解力を持っているが、500 点台の学生は、どちらかの分野を得手不得手と感じている。それぞれ聴解力を伸長するとともに、リスニングの伸びほどではな

いが、リーディングの読解力も比例して伸びていることがわかる。リーディングにおけるビジネス場面やビジネス文書の出題に慣れ親しむという他に、リスニングで使用される英語語彙は、基本的にリーディングにおいても頻出しているので、音声面と活字面の両面から語彙理解が進んだ結果とも考えられる。

授業外に TOEIC 学内試験の直前対策をここ数年継続して行っている。初回の時には、数名の参加者しかいなかったが、2014 年度あたりから 10 名前後の学生が受講している。これまで公式問題集を使用して、リスニング、リーディングそして模擬試験というプログラムで各 90 分連続 3 日間を海老澤が担当していたが、今年度 2 回目の学内試験の直前に、外部講師 2 名にお願いしリスニングとリーディングの対策を 1 日ずつ担当してもらった。講師は、民間の語学学校で大学、企業、行政関係機関対象に TOEIC の指導を担当してきた、いわゆる TOEIC 指導のプロである。

授業終了後、対策授業に参加した学生 11 名にアンケートを行った。それぞれ 90 分という短い対策授業にもかかわらず、受講者たち全員の回答は、講師の授業に大変満足しており、こうした対策授業には今後も参加したいという回答が多かった。「以前、外部機関において事前対策を受講したが、その対策授業はただひたすら演習を行うものであり、今回のような内容はきわめて新鮮であった」という回答があった。リスニングとリーディングを解答する際に、大学生の基礎英語力レベルでどこに力点を置いて解答すべきかを実例を持って行われた簡潔な指導を学生たちは高く評価していた。授業を参観した私から見ても、講師の一方的な指導ではなく、学生たち自身に問題出題の意図を理解させ、誤り易い点や効率的な解答方法を発見させるというものであった。一方、通常の授業と時間帯が一緒であったこと、アルバイト等の

関係で対策授業に参加できなかった学生も10名以上おり、そうした学生たちもこういった対策授業には積極的に参加したいと述べている。その他の希望としては、こうした対策を直前ではなく、数週間前に行ってほしいという声が多かった。というのも、今回の対策授業で学んだことを自学自習する際に試してみたかったが、その時間的余裕を持ってなかったのが残念だったという意見が多く見られたからである。

5. 今後の展望と課題

(1) 英語資格試験受験の奨励

TOEICに限らず英検も含め、今後も大学全体で英語資格関係の試験の受験者を増やすことが重要ではないだろうか。本論の冒頭1章で述べたように、2020年の教育改革ならびに東京オリンピック・パラリンピック開催に照準を合わせて、さらにグローバル化を推進してゆく方針を文科省は明言している。今後の初等教育は、英語授業が導入され、その推移によっては、大学の格付けにも影響してくる。大学教育において語学力だけが教育内容の質を測れるものではない。がしかし、大学を終了する際に学生たちが選択できる将来の選択肢が格段に増えること、人との交流の面において幅広い人脈が獲得できること、さらに広い視野や思考など人格的豊かさが育まれることなど、未来の人生や生活に大きな影響を及ぼすコミュニケーション能力のキーポイントであることは広く認められている。

学士力と一般に言われるが、今後も大学教育の成果を客観的に示すことが求められるであろう。教育成果が全て数値化できると思わないし、また数値化に偏るあまりに、それが目的になってはいけなさと考えている。しかし、現在のところ、大学教育の内容を示す場合、こうした資格取得に力点を置くことから始めなければならないと考えている。資格対策授業受講者やTOEIC受験者数は徐々に増加しているが、全国レベルからすればまだ十分な総数ではない。他大学においては、取得単位として認める、あるいは入学時において、外

部テストの結果をすでに導入しているところも現れている。本学において資格取得制度が設けられたことは、学生の学習意欲や動機に大きな影響を及ぼし、この制度を活用したいと思う学生が増えてきた。今後の課題は、その層の学生をさらに増やしていくことであろう。あるいは、学生の多くに窺える傾向だが、資格試験に対する忌避感をいかに拭ってゆくかである。こうした課題は、教育理念とキャリア教育の方向性に深いつながりを持っているのではなからうか。

2章において示したが、大卒者の80%がこれまでTOEICを受験したことがない。これは、これまでの学生時代に求められていなかったからであろう。実際に、実業界に入ってから、その受験を求められるケースが多い。今後、この数値は確実に変化してゆくと思われる。そこで、受験期や指導体制などを熟慮しなければならないのだが、本学において、在学中に最低3回は受験するなどの基本方針を打ち出してもよいのではないかと考えている。

(2) リスニング強化

学生の受験結果からわかるように、リスニングのスコアがある程度獲得できるような段階に到達するのが、まず重要であると思われる。スコアの点から言えば、リスニングとリーディングの合計点が400点台から始まる。このあたりのスコアを獲得すると、学生たちはリスニングの方が得意であること、時間内に解答できるやり易さを理解していることなどの理由から、自身に動機づけ、ならびに自信が生まれてくる。また、リスニングの無料アプリなどが多種多様に開発されているので、学生の中には、手軽に隙間時間を利用して学習している者もいる。また、300点台の学生の多くは、このリスニング分野を強化することで、400点台を獲得できる潜在的な力を持つ学生が多くいることも指摘しておく。

一方、TOEICのリスニングは、先述したように、ナチュラルスピードでアメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアなどの多様なアクセントのナレーションを使用しているため、実際のコミュ

ニケーションの場面にも対応し易いという利点がある。長年、日本人が英語を学習しているにもかかわらず、海外に行ったとき英語を理解できない要因のひとつは、相手が話す内容をまず理解できないことにある。古くからの笑話で、相手の言うことがわからないので、とりあえず‘Yes’と返答したらとんでもないことにあったというものがある。コミュニケーションの基本は、聴解力から始まると言ってもよいと考えている。

また、私自身、様々な授業を担当し戸惑うのだが、昨今の学生は、英文を声に出して読むということを厭う。リスニングは、声を出す必要がないのだが、印刷された英文さえも黙読に終始する。これでは、リスニングやリーディングにおいて、学生たちが実際に聴力の働きをどれくらい活用しているのかがわからない。リーディングも、音声として発声することで、語彙の発音、リズム、イントネーションなどを確認ならびに矯正できるものであり、黙読ではなく極力音読を奨励したい。

(3) カリキュラムの中の資格英語

2014年度から新カリキュラムが施行された。いわゆる「キャリア英語」としての資格対策授業は、基礎から始まり、英検対策、TOEIC対策と5科目設定されている。この1年、その一部を担当した側として、カリキュラム上は、ステップアップを目論んだ科目設定なのだが、そのステップアップの段階を踏んだ科目履修が行われていない。基礎力がない学生が、高次の科目を履修する、あるいはその逆もある。これは、時間割編成、理想的な科目履修が実現できないという物理的な問題もあるが、何よりも学生側に、ステップアップを配慮した科目設置であるという認識が浸透していない。これは、今年度の授業履修者が大幅に増えた一方で、その認識が十分でないために、実際の受験に結びついていないことからわかる。

ステップアップを目指した「キャリア英語系」科目については、時間割編成上においても配慮が必要であると同時に、「基礎」を多くの学生が履修できるよう、コマ数を増やす、履修しやすい時間帯に設置する初年次科目と考える。さらに、

「キャリア英語Ⅰ」から「キャリア英語Ⅳ」までの履修者には、TOEICや英検の受験を義務付ける、また、履修者が履修途中において、当該科目が取得目指す資格を得られた場合は、申請により定期試験等を免除されるなどのガイドラインを明確にする必要があるだろう。

ただ、こうしたガイドラインを設けることが、英語教科単独の方針に止まってはならないと考えている。というのも、教育の質の確保、学士力の明示化という課題を念頭に入ると、キャリア教育の向上という点に大きく関わって来るからである。キャリア教育を担う重要な分野であるという認識を確立してほしいと願っている。これらの科目は、語学系科目では「キャリア科目」として設置されているので、現在行われている就職対策セミナーに加えて、キャリアセンターでもこうした資格対策にも力を注いでもらいたい。また、TOEIC対策だけを取っていても、近隣に住むビジネスパーソンをも対象に含めることも可能ではないかと思っている。これは、生涯教育などの分野に関わるので、駒木学習センターとも連携できる分野ではないだろうか。

キャリアセンターや学習センターとの連携が可能になれば、例えば語学学校からの外部講師による豊富なプログラムが用意できるであろう。本学の教育理念を踏まえ、さらに今後のグローバル化社会の対応を考えると、語学学習は学務上の学習カリキュラムに止まらず、他の組織や機関と連携することで、あらたな広がりや幅が獲得できる可能性があるのではないかと考えている。

(了)

《注》

- (1) 拙論「アメリカの代表的スピーチの修辞について」1頁『English Education』vol.11(江戸川大学, 2013年)。
- (2) 第9回議事録「語学教育に関する有識者会議」文部科学省ホームページ。
- (3) グローバル採用の実態調査 <http://doda.jp/guide/ranking/056.html#01>
- (4) 松岡昇著『「英語の壁」はディクテーションで乗り越える!』18頁 2011年 アルク

A Survey of Classes for English Qualification and Results of TOEIC Over the Past 6 Years, and Major Tasks and Some Prospects

EBISAWA Kunie

Abstract

In 2014, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology stated that by 2020 it is determined to take drastic and practical actions in order to cope with swiftly developing globalization by making major changes in English education. Besides, business world in Japan is also demanding that its future employees obtain higher levels of English skills. Given these conditions, it is obvious that in the near future how much college-level English education has achieved will be called into question, which may lead to an evaluation of educational quality at universities.

This paper is a survey of English qualification classes and results of TOEIC over the past 6 years. The number of students taking English qualification classes and TOEIC has increased during these years. More students have succeeded in achieving higher scores as well. However, as the number of students remains small there is still much more room for improvement.

Therefore I discuss problems associated with encouraging more students to obtain practical communication skills and the significance of emphasizing English qualification education at Edogawa University. I also suggest several changes and proposals in the academic curriculum in close coordination with the other sections/centers. English education for qualification should be considered a major part of career education. For beginners, listening comprehension should be emphasized much more as the basis of language acquisition and communication. There is also a possibility of expanding English education for qualification by cooperating with, for example, the Career Center and the Open College programs.